

チベット仏教研究の昨今

小川 一 乘

チベット仏教文献に対する研究は、最近の仏教研究の中にあつて急速に進展しつつある分野である。特に、この数十年間におけるその進展には目ざましいものがある。

チベット仏教文献といへば、かつては、インド仏教研究のための補助文献という範囲内にあつた。それは、チベットではインド仏教を受容するために、自らの母国語を創造したほどに、チベット語訳文献（チベット大藏經として収録されている翻訳文献）は、サンスクリット原典を忠実に訳出しているという利点によって、インド仏教研究のための準サンスクリット原典として重要視されているからである。加えて、サンスクリット原典の多くが散佚している現状においては、今後とも、この準サンスクリット原典としてのチベット語訳文献の重要性は変わらない。現に、このチベット語訳文献によるインド仏教

研究は着実に前進している。

ところで、チベット仏教文献には、このチベット語訳文献のほかにチベット大藏經に収録されていない蔵外文献がある。それは、チベットに仏教が流伝し定着してそこに誕生したチベット仏教におけるチベット人自身によって著作された文献である。従つて、それは、インド仏教研究のための補助文献・翻訳文献ではなく、チベット仏教そのものを研究するための文献である。ここ数十年来とくに目ざましい進展を遂げつつあるのは、このチベット仏教に対する研究、すなわち、蔵外文献に対する研究である。

チベット仏教そのものに対する研究が、ここ数十年来、急速に進展したことの必然性は明白である。それはいう

までもなく、約三十五年前にチベットが中華人民共和国の自治区となったという政治的事情である。この政変の後、一九五九年に、チベットにおける政治と宗教の最高指導者であったダライ・ラマ十四世がインドに亡命するという事件が起ったが、そのとき、チベット仏教の学僧たちの多くがダライ・ラマと行動をとともにした。このことが機縁となつて、その後、チベット仏教が世界に流出することになったのである。

それまでのチベットは鎖国状態にあつたため、チベットの歴史に関する研究は、主に中国資料に対する研究が進む中で徐々に進められていたが、チベット仏教に対する研究は遅々としていた。わずかに仏教史書に対する Clandra Das などの研究の中で、その概要に触れることができただけであるといつてよいであろう。

この亡命以来、塞き止められていた水が堰を切つて流れ出た如くに、チベットの宗教、言語、歴史等に関する研究が世界に広まり現在に到つていたのである。このよ様な事情の中で、近年、チベット仏教に関する研究業績が続出しているが、それは殆んど例外なく、インドに亡命したチベット人学僧の協力を受けたものであるといつてよいであろう。

私をはじめてチベット人と直接に面識を得たのは、一九六二年夏、東洋文庫（国会図書館分室）で行なわれた「チベット語講習会」においてであつた。この講習会は、八月二〇日から九月二日まで土、日曜日を除いた二五日間、ユネスコ東アジア文化研究センターの主催で開かれたものであり、チベット語の講習会としては日本ではじめてのものであつた。この講習会が実現したのも、チベット人のインド亡命事件が起つたことによるのである。

このとき日本に招かれていたチベット人は二人で、一人は、ツェリン・ドルマさんという美しい女性であり、一人はサキャ派の活仏であるソナム・ギャムツォ師（後に日本に帰化）であつた。この二人は、「チベット人と協同によるチベットの言語・歴史・宗教・社会の総合的研究」という幅の広い研究のために招かれていた。ツェリンさんは仏教についての知識を持っていなかったが、チベット語（言語）の研究に協力し、チベット語をきれいに発音する英語の上手な教養人であつた。

その当時、私はインド仏教における仏性思想に対する研究を主としていた。その関係で、チベット仏教においてダルマリンチェンという学僧による『究竟一乘宝性論』

『宝性論』と略称) に対する優れた註釈書のあることを知り、その解説に頭を痛めていた。それというのも全くの暗中模索の状態であったからである。拙著『インド大乘仏教における如来蔵・仏性の研究』(一九六九年)に「序」を下さった山口益先生が、その中で、

「ダルマリンチェンの釈疏を解説するに当って、その相談相手を勤めることには相当困難を感じた。旁々、ダルマリンチェンの註釈解読の過程にあつては、私は殆んど相談相手の用をなさなかつたのであろう。十数年に亘つて、ダルマリンチェンの註釈を手さぐりに判読して、宝性論の思想内容を精一杯理解しようとなつた著者……」

と述べて下さっていることによつても、そのことは伺い知られるであろう。従つて、ソナム師の来日はまたとない幸運に恵まれたものとする。私は、師に対して多くの問題を提示し教示を求めたが、結果的には適切な教示は得られなかつた。しかしそれはきわめて当然なことであつたのである。ソナム師はサキャ派の学僧であり、ダルマリンチェンはゲルク派に属する学僧であつたからである。たとえば、真宗の宗学者に禅宗や日蓮宗の宗義を尋ねるに等しかつたと考えてよいであらう。

サキャ派の学僧であるソナム師の協力を得て立派な業績を出したのが立川武蔵氏(名古屋大学)である。それが、ローサンチホーキニト(Blo bzang chos kyi ni ma, 1737-1802)によつて書かれた宗義綱要書である『シャルキメロン(Sal gyi me lon)』の中の「サキャ派の章」の解説研究、

西蔵仏教宗義研究、第一巻——トゥカン『一切宗義』サキャ派の章——(東洋文庫、一九七四年)

である。立川氏の業績を讃えて、私はその書評を「仏教学セミナー」第二二号に寄せた。ちなみに、私はその中の「ゲルク派の章」を分担していたが、当時の学力では充分な解説ができないまま途中で研究を放棄してしまつた。弁解ではないが、その他のニンマ派、カダム派、カギユ派、シチェ派、チョナン派などの各章をそれぞれに分担した同僚たちの業績も纏つたものとして出されたことを寡聞にして知らない。

その後、東洋文庫には入れ変わり何人かのチベット人が来日したが、その中には、高い学識をそなえたゲルク派の高僧はいなかつた。一九七四年にいたつて、国際仏教徒協会によつてツルティム・ケサン師が日本に招かれたが、師は高い学識をそなえたゲルク派の学僧である。

師こそ、一九八四年六月に日本に帰化し、現在は本学の専任講師である白館戒雲氏である。

ともかく、チベットの政変を境としてチベット仏教研究は日進月歩の勢いで進展して現在に到っているが、まず最初に注目すべきは David Seyfort Ruegg 氏の業績である。氏はチベット周辺の国々に滞在して、多数のチベット仏教文献を精査して優れた業績をあげているが、その中で特に、チベット仏教における如来藏（仏性）思想に対する研究業績として次の二著書は注目すべきである。

Ola Théorie du TATHAGATAGARBHA et du
GOTRA (Paris, 1969)

Ola Traite du TATHAGATAGARBHA de BU
STON RIN CHEN GRUB (Paris, 1973)

次に注目すべきは、チベット仏教において独特な文献 Grub mthah (宗義綱要書) に対する研究である。これは、インドやチベットにおける仏教各派の教義内容の特色、その相異点などを簡潔に説明している仏教概論に類する文献である。これによって、後期インド仏教の様相

やチベット仏教の事情などを、あくまでも概要的なものではあるが、手っ取り早く知ることが出来る便利な文献である。この Grub mthah についての研究が盛んに行なわれ多くの成果が出されている。それらの中にあって纏った業績としては、御牧克己氏（京都大学）の労作
O BLO GSAL GRUB MTHA' (Kyoto, 1982)

がある。特に、氏の業績に代表される Grub mthah の研究によって、資料が充分でない後期インド仏教の各学派の教学的特徴や関係などが相当に明らかとなったという成果は特記すべきである。しかし、いうまでもなく、概論書という Grub mthah の限界をよく認識し、その特性を生かしつつ、より緻密なチベット仏教研究へとこれから前進していかなければならないであろう。ここ数十年間のチベット仏教研究の歩みは、この Grub mthah に対する研究によって、それまでの亀の如き歩みから兎の如き歩みに変わってきたが、また再び亀の如き歩みに立ち返って、チベット仏教の緻密で深遠な哲理に学問的に取り組んでいかなければならない水準にまでチベット仏教研究は進展しつつあり、それは目前にせまっているようである。

チベット仏教における重要な文献の解読研究が世界各国から公刊されるこの頃であるが、それらはすべてチベット人学僧の協力によって可能となっているといっている。これからも続々と同様の成果があげられていくであろうが、特にゲルク派において重視されているツォンカバとダルマリンチェンの著作に対する研究に限って、それらを管見しておく。

ツォンカバ (Tsong kha pa, 1357-1419) は、ここに述べるまでもなく、チベット仏教といえばツォンカバであるといっている程にチベット仏教を代表する人物である。かれによってチベットの学問的仏教は確立されたといえてよい。従って、かれの著作に対する研究はチベット仏教研究にとってきわめて重要である。かれには多くの著作があるが、それらに対する研究として、近年では、チャンドラキールティ (Candrakīrti, 600-650) の『入中論』に対するかれの註釈の英訳 (但し、第一章から第五章まで) が Jeffrey Hopkins によって公刊された。

○ Compassion in Tibetan Buddhism (London, 1980)
この業績は、いまは「ギヤナム」の大学者 Kensur Lekdan (1900-71) の「Jam yang shay ba」の註釈を学んだり、Geshe Wangyal (1901-83) の協力を得た

中で実現したものである。しかし、チャンドラキールティの『入中論』は、ここに英訳された前五章の次の第六章「般若波羅蜜多章」こそが最も重要であり、拙著『空性思想の研究』(一九七四年)はその解読研究であった。拙著においても、ツォンカバの註釈を参照したが、ノート程度の粗末なものに終わっているため、目下、白館戒雲氏の協力を得て再度の解読を試みている。

また、最近では、ツォンカバが唯識思想に関して論究している大乘仏教概論『了義末了義』「善説心随」(Legs bśad stñi po) (Otani, Nos. 6142, 10103, 10132, 10135) の英訳が、Robert A. F. Thurman によって公刊された。

○ Tsong kha pa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquence (Princeton, 1984)

この業績も、先と同じくチベット人学僧 Geshe Wangyal の協力によって可能となったことが知られる。かれは、その序文において、

「かれ Geshe Wangyal は、チベット語の核心に私を導き、この『善説心随』を開く多くの鍵を私に与えて下さった」

と、その学恩に対する深い感謝の気持を述べている。この『善説心随』の解読研究については、本学の片野道雄

氏も白館戒雲氏の協力の下で数年前から取り組んでいる。いずれ、この英訳に対する学術的な面からの論評が片野氏によってなされるであろう。それを待ちたい。というのは、先の J. Hopkins の英訳も同様であるが、この R. A. F. Thurman の英訳は、チベット人学僧の教示を得て遂行されたものであるから、チベット仏教における宗義学の範囲内での理解であると思なされるからである。もしそうであれば、それは文献学的研究の立場からどのように評価することができるのかが問題となるであろう。

次に、ダルマリンチェン (Rgyal tshab Dar ma rin chen, 1364-1432) の著作についてであるが、私がダルマリンチェンの名前を知ったのは、すでに述べたように『宝性論』に対する研究途上においてであった。それも、『宝性論』のチベット訳が、E. Obermiller によって英訳された

○ The Sublime Science of the Great Vehicle to
Salvation, being a Manual of Buddhist Monism
(Leningrand, 1931)

に導かれて、『宝性論』に対して優れた註釈をほどこしているダルマリンチェンというチベットの学僧の存在を知ったのである。『宝性論』に対する註釈書は、先の D.

S. Ruegg の著作の中に列挙されているように、チベット仏教内には多くあるが、E. Obermiller はその英訳の序文において、ダルマリンチェンの註釈書の序論を依用し、それを重視している。

このダルマリンチェンはツォンカバの第一の弟子であるが、ツォンカバは、かれを弟子としてというよりも、その深い学識に畏敬の念を持って特別に遇したという。ダルマリンチェンにも多くの著作があるが、それらの中にあつて注目すべきは、この『宝性論』と『現觀莊嚴論』の二論書に対する緻密な註釈である。周知の如く、これらは、チベット仏教の伝承における弥勒の五部論に含まれているが、特に、ダルマリンチェンは、この二論書において弥勒の仏教の真髓が説かれていると見なしている。そのことは、この二論書に対する註釈をほどこす前に、詳細な序論(前文)を展開しているその中で、弥勒の五部論の内容を論じているその記述によって知られる。ちなみに、これら二論書に対する註釈の序論においてそれぞれに展開されている弥勒の五部論についてのダルマリンチェンの記述は、一字一句の相異もない程に全く同一である。

しかし何といつても、ダルマリンチェンの学識を遺憾

なく發揮しているのは、論理学書に対する並はずれた歴
大で緻密な註釈的研究である。かれはダルマキールティ
(Dharmakīrti 法称)の代表的な三著作 Pramanavārtika,
Pramāṇaviniścaya, Nyāyabindu に対して詳細な註釈を
行なっている。その質量ともに他を圧倒した業績は、チ
ベット仏教の学問の高さを示している。それらを順次に、
大谷大学所蔵の『西藏文献目録』によって列挙すると

○ No. 10164 : Tshad ma rnam ḡrel gyi tshig lehur
byas paḡi rnam bsad thar lam phyin ci ma log
par gsal bar byed pa. (Cha. 1-408)

○ No. 10167 (A), (B) : Bstan bcos tshad ma rnam nes
kyi tika chen dgons pa rab gsal (Ja. 1-307, Na.
1-260)

○ No. 10169 : Tshad ma rigs thigs kyi ḡrel pa legs
bsad sñin pohi gter (Na. 1-63)

である。いずれも歴大なものであるが、その中でも Pra-
mānaviniścaya に対する註釈は前後二巻あわせて五六
七葉にも及んでいる。これらを読破していくには日暮れ
て道遠しの思い切であるが、すでにこれらダルマリント
ヘンの論理学書に着目して、その研究に着手しているダ
ルマキールティの研究者のいることも耳にしている。

以上は、チベット仏教研究(特に思想的な面に限って
の研究)の昨今についてのごく限られた範囲内での素描
である。チベット仏教の文献研究による論文は多方面に
わたって続々と出されているが、それらに言及すること
は省略した。その他、チベットやその周辺の国々におけ
る現地調査も次々となされ、現在のチベット仏教の寺院
の実情やその活動状況などが報告されている。例えば、
チベット仏教の寺院内部に描かれているマンダラと日本
の真言仏教のマンダラとの比較などが話題となっている
等々である。

また、チベットの政変以後、チベットの文献がインド
に流出し、¹⁾ 世界へと流布している現在、それらチ
ベットの文献のすべてに精通して、貴重な文献のチェッ
クをしながらそれらの目録を地道に作成している Gene
Smith 氏(インド在住)の存在も忘れてはならないであ
ろう。

最後に、チベット仏教研究とは直接の関係はないが、
最近、ナーガールジュナ(龍樹)の著作に関する面白い
業績が出版された、それは、Chr. Lindtner の

○ NAGARJUNIANA—Studies in the Writings and

Philosophy of Nāgārjuna—(Copenhagen, 1982)

である。その中で Chr. Lindner はナーガールジュナの真作として (1) *Mūlamadhyamakakārikā*, (2) *Sūnyatāsapatti*, (3) *Vigrahavyāvartanī*, (4) *Vaidalyaparakarāṇa*, (5) *Vyavahārasiddhi*, (6) *Yuktisāṣṭikā*, (7) *Caṭustava*, (8) *Ratnāvalī*, (9) *Pratītyasamutpādaḥīdyakarikā*, (10) *Sūtrasamuccaya*, (11) *Bodhicittavivaraṇa*, (12) *Suhṛtlekha*, (13) *Bodhisambhāraka* の十三著作を挙げている。これらの中で、ナーガールジュナの真作として確認されているものは (1)、(2)、(3)、(4)、(6)、(7)、(8)、(9)、(12)、或いは真偽問題の話題になっているもの (10)、(13) を除くと二著作 (5)、(11) が残る。その中で、(11) *Bodhicittavivaraṇa* は、ツォンカバによってナーガールジュナの真作とされ、『入中論』の註釈の中にも教証として屢々引用されている。北京版大藏経には、この著作は、秘密疏部 (vol. 61, No. 2665) の中観部 (vol. 103, No. 5470) とに二部収録されている。内容的には全く同一ではあるが、訳語等の訳出の仕方はかなり相異している。尚、この著作の要約したもの (vol. 61, No. 2666) もナーガールジュナの著作として収録され、さらに *Smṛtijñānakīrti* にその註釈 (Tika, vol. 62, No. 2694) がある。

この著作に興味を覚えるのは、その中で、『入楞伽経』に類似した表現で説かれているアーラヤ識について関説されていることである。それはツォンカバによって引用されている次の三偈である。(ツォンカバの引用文は No. 2665 と大体が一致する)

「たとえば磁石に近づくことによって鉄はすみやかに動く。それ(鉄)に心はないが、しかも心を見えているかの如くに見られるのである。

その如くに、アーラヤ識は真実ではない(虚妄である)が、しかも真実の如くに、去り来たりして動くとき、「常に」有(三界)に束縛される。

たとえば、海に「浮んだ」木は心がなくても動く、その如くに、アーラヤ識は身体に依りて動くのである」

*以下は、Chr. Lindner によって「海と木は……」と英訳されている (la→dan)。また異版 (No. 5470) では *rgya mtshohi mthas gtugs pañi// sa yan~(海辺に接した地もまた……)* とあり、それに続く二句も意味不明。

このように、この著作はアーラヤ識に言及しているが、そのことを知りつつもなお、これをナーガールジュナの真作の一つに数えている Chr. Lindner は、

「Yuktisastika 2 Catuhstava 2」の Bodhicitta-
vivarana とは、後期のインド文献において、ナー
ガールジュナに帰せられているすべての著作の中で、
最も屢々引用されているというのが、私の一般的な
印象である」

と述べている。残念ながら、このことについてはそれ以
上に詳しい論証はなされていず、今後さらに厳密な論証
がなされるであろうことを期待したいが、ともかく、き
わめて重要な問題を含んだ面白い見解である。